

本学の発展に大きな貢献 —海老澤信一教授への献辞

学園長 島 田 燐 子

海老澤教授が本年3月をもって文京学院大学を定年退職されることになりました。学園長である私がいかがなものかと躊躇もしましたが、私が理事長・学長を務めていたときに入職され、先生が学部長時代もご相談にあずかって色々な改革を勇敢に進めてくださった点ではとてもご縁が深いので喜んで献辞をお引き受けしました。

先生が私どもの大学に情報処理科目の専任講師として入職されたのは平成4年4月、まさにコンピュータが大型の専門性の高いものと同時にパーソナルへ向かう1990年代の初めでした。ウインドウズが登場し、ビジネスの必須となりつつありました。

先生は早稲田大学理工学部工業経営学科をご卒業後日本ユニパック株式会社に入社され、多くの会社のシステムを担当するとともに通商産業省国家試験「特種情報処理技術者」を取得。文教大学の電算機センター室長、教務部長、専門学校専任教員を経て本学経営学部の情報教育のメンバーとなられました。清水春樹教授(現名誉教授)とともに情報教育センターを設立、教員の情報教育の指導もされつつ本学の情報教育のプログラムの具体化に取り組みられました。後に長野に帰郷された矢野口聡氏の貢献も大きかったとうかがったことがあります。本学の情報教育は関係者の努力によってかなり先進的でありました。先生は本学の特徴の「ゼミナール主義」にも熱心に取り組み、多くのゼミナール入室希望者が集まり、人気が高かったのです。ゼミナール連絡委員会は各ゼミの討論会に力を入れてきましたが、1990年代の終りころから情報系のゼミの発表にもプレゼンテーションの工夫がなされるようになっていきます。この指導もされ教員として学生のためにとっても熱心でした。

平成11年、教授に昇格、15年には大学情報教育研究センター長を兼職、大学全体のシステム、情報教育の在り方の検討に時間を費やされました。特に全学の教学システムの検討を経て方向を決めるためにその後もご苦勞の連続であったと推察します。将来構想委員会が発足し、女子大学を共学化するとの結論を出し、まず校名を「文京学院大学」とし、2年後に経営学部を本郷校地に移し、ふじみ野校地に「保健医療技術学部」を新設するのは全学的な大事業でしたが、先生は平成17年から21年までの重要な4年間を経営学部長としてリーダーを務められ、困難な共学化の時期を見事に乗り切られたのでした。当初は様々なことが懸念されましたが、むしろキャンパスは活性化し、入学希望者も増えました。

しかし、このころから大学入学者の多様化にともなう大学改革が中央教育審議会から強く要請されるようになりました。高等教育の質保証（学習の質の担保や国際的通用性）がいわれ、認証機関である第三者評価システムによる評価が大学の義務となった時期でした。本学も2キャンパス4学部10学科の体制となり、この組織体を運営するべく「大学運営会議」を設置して両キャンパスの改革と運営の円滑化に努めたのでした。以来「学長補佐」として海老澤先生が果たされた役割は大変大きかったと申せましょう。

情報教育の構築と転換期の大学を導いたリーダーのお一人であり、かつ経営学部新生のリーダーでもありました。清水春樹前学部長の方針を受け継ぎ、海老澤学部長も経営学部の教育方針として満足度の高い教育サービスの提供、少人数・手作りの教育、ゼミナール主義、実学・資格教育の徹底を具体化すべくカリキュラム改革をすすめ、「大学学」（担任制度）、「職業とキャリア」を1年生に設置し、コンテンツ関連科目、ネットワーク関連科目を新設されました。平成16年には経営コミュニケーション専攻と経営情報デザイン専攻の2専攻とし、平成18年には後者をコンテンツ・ネットワーク専攻と改め、ビジュアル・コンテンツコースと情報ネットワークコースと、経営学部の特色を情報系で打ち出されました。

インターンシップ制度は学部初期からの特色でしたが、より本格的にプロジェクト型の実践の試行を始め、3か月にわたる研修や上級ライセンス取得を奨励してマイクロソフト検定を受験させ好成绩をあげ、経営学部の情報化を進められたと思います。と同時に「学習サポートセンター」を本郷キャンパスに設置し、親身に学生からの相談、指導、学力向上に当たる部署とし、センター長を4年間務められました。そして最も大きな功績と申してよいのが「初年次教育」をきちんと導入して根付かせたことでしょう。大学進学率が50パーセントを超えたユニヴァーサル化時代において大学生は自ら学ぶものとの従来の高等教育観では学生の半分はほとんど何も身に付けずに過ごしかねないのです。大学が学力を保証するには学生自身が大学での学び方を習得し、自らの目標をたててその実現に努めることが前提になります。今もってこの徹底は困難なのですが、先人を切って初年次教育に力を入れて確立をされたのでした。

先生が産業界から教育の場へと転身された時期は情報機器ばかりかシステムそのものもネットワークも予想もできない変革をとげました。情報は国境を超え、生活を変えつつあります。先生は数個の学会に所属されて、絶えず新しい情報を研究されて「論集」にもほとんど毎年論文を掲載され、教育現場と密なものも多いのです。以上のようなご努力に心からの敬意を表し、先生に感謝をささげる次第です。

平成27年10月18日